

“竜の眼” — 資料と短信 —

北京雑文三題 — 中国留学後記 —

辻 雄二*

1

93年夏、改革・開放の風吹く北京では「廃都」（北京出版社12,5元）、「白鹿原」（人民文学出版社12,95元）という2冊の小説が人気を博した。前書は人気作家賈平凹の作品で初版から10万部が上梓されている。驚くべきは後書で、6月の出版後8月には第3次印刷を重ね、その印数は21万4850部に達した。作者陳忠実は主に短篇小説を書き続けてきたと紹介されている。中国の常としてこの人気作品の映画化が決まったという報がなされた。舞台は渭河平原の一農村白鹿原。清末から新中国にいたる時代に生きたある家族の話である。主人公の男が娶る女性が次々に世を去り、ついに生涯7人の女性を迎える。その間土地の強奪、孝行息子の悪事、舅の嫁殺害など。そして大革命、抗日戦争、共産党政権誕生と目紛しく統治をめぐる戦闘が続く。数奇な運命に親子とその村の篤志家が、小さな農村が巻き込まれゆく様が描かれている。農村の生活描写は言うに及ばず、嫁に巣くった「鬼」を「法官」が討つ様子。婚姻儀礼、産育習俗、同族祭祀などの描写が細くくなされている。もちろんこれがこの本のセールスポイントではないであろうし、飛ぶようにして売れた理由でもないであろうことは文学に疎い私にも想像に難くない。しかし作者は前言にバルザックを引用し「小説被認為是一個民族的秘史（小説は一つの民族の秘史である）」と記している。ならばそこに描かれる民俗の有り様を覗き見するような読みがなされてもよいのではないかと思う。またそれに興味がそそられるような作品であった。

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

93年10月、北京師範大学中文系に「中国民間文化研究所」（所長 鐘敬文教授）の設立が認可された。国内外において広大な人民が創造する、そして伝承と変容しゆく基層文化への注目が集まる中、その豊富な民族・民間文化資料を収集、研究することを目的としている。研究所の主要な研究計画を簡単に紹介すると、1)民間文芸と民俗資料の収集整理及び国内外の学術研究書保存のために資料庫を建設し、民間文化資料センターとしていく。2)中国の豊富な民族民間文化資料にとって進めるべき課題研究を行なう。3)開放地区の民俗調査の計画。4)国内外の民俗学者ならびに民間文学研究者の受け入れを進める。5)「中国民間文化研究」の発刊、関係学術書の編集出版。ここでいう「民間文化」とは鐘教授がここ数年来主張しつづける名称で、従来の「民俗」にかわるものとする考えが、氏の「民間文化を語る」（人民日報出版社、1990）などで明らかにされている。更に「民俗文化学発凡」（「北京師範大学学报」1992・5）と題し、その概念と範囲、諸社会科学との関係へと論を進めている。ここで氏の膨大な著作を繙き、民俗学、更に「民間文化」学を理解することは容易ではない。他に楊坤、劉魁立、張紫晨、烏丙安、陶立璠の諸氏が中国民俗学の概説を行なっている。現在日本からも多くの研究者が調査・研究に中国を訪れる機会も増え、その交流の絆は徐々に強まる傾向にある。共同調査も盛んである。互いの築き上げた成果を正しく評価し、理解を深めていくことが重要なのは言うまでもない。したがって中国の民俗学研究については詳しく検討する機会を別にもうけたい。

1978年に顧頡剛、鐘敬文等7名の代表的研究者によって「民俗学および関係研究機関の設立意見書」が社会科学院に提出された。83年に民俗研究の全国組織として中国民俗学会が成立した。しかしその「意見書」にある民俗学研究所は実現せぬままに今日にいたっている。この研究所がその代わりというわけではなからうが、その設立が中国

民俗学にとっても新たな一歩を踏み出したことには違いなく、その発展が大いに望まれるところである。

3

93年10月26日から29日までの四日間、「中国民俗学会第3回全国代表大会及び第5次学術討論会」が北京・中央民族学院において行なわれた。全国代表大会は83年に成立大会が開かれてから三回目、また学術討論会は85年より開かれており、今回は全国規模の大会が同時に開催された。現在学会は全国56の民族中37民族、1259名の会員によって組織されている。地域的にも広汎で、今回個別発表された論文、報告の内容が多彩を極めたものであったことから実感される。大会一日目、国務院、中国社会科学院、中国民間文芸家協会、中国人類学会、中国民族学会等の代表者列席のもと開幕式が執り行われた。鐘敬文民俗学会理事長は開幕の辞で「今大会において今までの研究成果を検討し、急務とされる学術研究の方向性を定め明らかにする大会とせねばならない」と述べ、民俗学が独立科学として強調されねばならぬこと、またそれが時代の要請であることを講演された。引き続き行なわれた学術交流会では烏丙安（遼寧大学）「日・独・韓及び台湾訪問に関する簡要報告（85年5月93年1月）」、宋兆麟（中国歴史博物館）「歴史発展への順応研究の積極的展開」、そして日本から渡邊欣雄（都立大学）「日本民俗学研究情況と北海道民俗研究」の講演がそれぞれなされた。烏氏の講演内容は訪問した国々での民俗学の情況報告で、1)民間文化、民俗文物の保存 2)民俗博物館の発展 3)民俗文化村の建設 4)民俗研究と出版の新潮を述べ、今後中国が国際交流の中で果たすべき役割を提示した。宋氏は民俗学に少なからず影響を及ぼす「市場経済の挑戦」を力強く迎えようという発言で報告を始めた。内容は現在の中国社会に発生した巨大な変化のうねりは二つの側面をもち、一つは経済的圧迫による研究条件の劣化、それに伴う拝金主義の横行といった負

の側面。しかし「市場経済」に様々な活路を見出すことは可能で、民俗学の需要を挙げれば深圳に建設予定の民俗村や民俗文化の映像化等の正の側面もあるとする。従ってすべからず現状を消極的にとらえるのではなく、積極的に民俗文化の重要性を世に知らしめることがこの時期に望まれる姿勢であるとされ、参加者に「檄」を飛ばされた。さらに研究については「過去」を注視し、徹底的な実証研究方法こそが優秀な伝統であり、隣接諸科学との密接な「総合的な比較研究」を指向すべきと提言された。

両氏の発表に共通したのは、改革・開放政策が急速に推し進められる中で急務とされる様々な民俗文化の保存についてである。宋氏は自らの海南島における黎族の民俗調査での経験を報告されたが、開発は予想をはるかに超えた進捗で、加速度的にすすめられているという。この問題に今後どのように中国の民俗学が対応していくのか興味深いところである。外国から唯一の来賓として報告された渡邊氏は92年の日本民俗学会のシンポジウムでのテーマについてその意義を紹介され、その視点を漢族研究に取り入れ、「漢文化を理解しようとするなら、中国民俗学会は漢族の住む全世界を相手にすべきである」と結論づけられた。（渡邊氏はすでにご自身で「中国民俗学会で講演して」と題して報告されている。詳細は『中国民話の会通信』30号93年11月、参照されたし）大会は二日目に個別発表が行なわれ、三日目劉魁立（中国社会科学院教授）による学会報告が行なわれ、第2回大会以後5年間の展開について報告され、「民俗の調査研究を発展的に深め、中国の特色ある民俗学構築のために奮闘努力の継続を」と呼び掛けられた。この間、学会副理事長にして研究の牽引的役割を果たしてこられた楊成志、張紫農両氏の急逝という不幸もあり、その意味からも劉氏の発言は力強く感じられた。29日、役員選挙など事務的な手続きをへて大会の幕は閉じられた。

中国で何度同じ質問に出喰わしたことだろう。「こちらで何をされているんですか？」その度返答に窮する自分を何度嫌悪したことであろう。出

発前にもその「何も知らないわからない」「自信も根性もない」のないない尽くしのまま留学する「志の低さ」を叱責された。広い意味での中国研究の層の厚さは十分理解しているながらも、「海のむこう」に民俗学があり、そこに不思議と興味があった。まず何ができるのか自分で確かめたかった。多数の「民族」が存在し、複雑な「伝統」をもった巨大「国家」を形成している国。そこに生きる人々の語る「言葉」に宿る様々な思いを如何にして理解するか。そして今「改革・開放」とい

う新たな「近代化」の波にさらされている中国において、民俗学の都市社会への注目、いわば「近代化」に対し民俗をいかに考えていこうかが問題の焦点となってきた。決して「ちょっと毛色が変わった差異」をつけるためではなく、「民俗」を考えるために役立つと考えて出掛けていった中国留学であった。今からは一つずつその答えを求めている。彼の地においてきた多くの暖かい「借り」を少しずつ返していけたらと思う。

(北京師範大学高級進修生 1993・12記)

新刊紹介

渡邊欣雄著

『風水 — 気の景観地理学 — 』

中国では、政治都市として堅いイメージの北京でさえ、このところの政策によって解放的な雰囲気を用意をはじめ、その景観・印象が大きく変わり始めている。昨年その北京に於いて、中国国家建設部の研究所主催で「中国建築風水理論」についての講習会が行われた。本書の著者である渡邊欣雄氏はその講師として招かれている。これまでに『沖縄の社会組織と世界観』、『民俗知識論の課題』などの著作があり、沖縄・台湾・韓国そして中国と東アジアを視野においた研究を展開し、一貫して「風水思想」を追求し続けた氏が、ついにはその成果をその誕生の地・中国で「迷信」の殻を破り、学問的対象として披露されている。

本書は『風水思想と東アジア』（人文書院1990）に続き、環境と人間の相関関係を識ることによって、そこに生きる人間と取り巻く自然の調和を図る中国古代の特異な地理学である「風水」の知識を社会人類学的視点からまとめ、解説した論著である。

全体は2部構成で、I部は第1章で本書のタイトル「風水 — 気の景観地理学 — 」について対話形式というよりは問答形式で、風水研究について、さらには実際の風水判断に及ぶ問題を解説されている。第2章ではさまざまな角度から繰り広げられる最近の風水論についてまとめられ、風水研究が「龍脈尽きず、気は涸れず」果していない広がりをみせる課題であることを知らされる。

II部は日本において唯一の「風水」理解が民俗生活に定着してきた沖縄を比較の原点とし、東ア

ジア文化圏での風水思想との関連で捉え直し、その特徴が述べられている。第1章「東アジアの風水思想と沖縄」、第2章「沖縄の墓地風水」、第3章「沖縄の屋敷風水」、第4章「墓と家族の地理学」、第5章「漢族の風水知識と住居空間」の構成からなり、特に第2章、3章は沖縄の与那国島・祖納をフィールドとし、墳墓ではなく墓地、住宅ではなく屋敷とするあたりに、風水研究の実際を読み取ることができる。第5章には台湾と福建省の事例が挙げられ、「風水知識」の淵源・中国へと接近する著者の研究姿勢が伺われる。

近年、日本でも中国の建築や都市を対象とした研究が活況を呈している。古来、中国人が信じてきた「天円地方（天は円るく、地は四角い）」と世界観によって、方形にかたちづくられた都市、あるいは建築物の構造。これらに込められた人々の意識もまた重要な問題である。この点についても著者は本書で触れているが、いずれも理念と現実と隔たりをもつ中国を識るための大切な手がかりを与えてくれるように思われる。

著者自身「あとがき」で述べているように、「満開期の桜」としての内容は十分備えており、さらに果てしなく広がる「風水」研究を思うと、その限られた時期の喩だけは不適切に思われる。本年7月には、環中国海の民俗と文化シリーズの第4巻として『風水論集』（凱風社）が三浦國雄氏との共編で上梓される。（辻 雄二）

A5判 294頁 人文書院
1994. 1月刊 2,472円